

音声言語研究序説 (1)

荒 井 義 明

1.1. 音声言語

1.1.1. 言語研究と音声言語

Henry Sweet は、*The Practical Study of Language* の第7章の冒頭で、「理論的 (theoretical) あるいは实际的 (practical) を問わず、すべての言語研究 (all study of language) は、音声言語 (the spoken language) に基づかねばならない。」¹⁾ と述べて、言語研究における音声言語の重要性を強調している。Sweet は全ての言語研究が音声言語に基づかねばならない理由は、音声言語が文字言語 (the written language) の源であるからであるとしている。

このことについて Sweet は、*The Practical Study of Language* で、「大抵の文法家達は、暗黙のうちに音声言語は、文語 (the literary language) の単なるなまり (corruption) に過ぎないと仮定している。しかし事実はその正反対である。文語の真の源をなしているのが音声言語である。」²⁾ と述べている。また *A New English Grammar* では、「文語は常にその起源は口語 (colloquial) である、すなわち、現代の音声言語と異なる全ての文語の形態は、実際は前の時代の化石化した口語体であるということに気付くことは重要である。(中略) 文語は、従ってある程度時代遅れのものであり、現代の音声言語が前の時代の音声言語と混合したものである。この理由から、言語の研究は、常にできる限りその時代の音声言語に基づくべきである。」³⁾ と述べている。

Sweet に従えば、言語の研究は、理論的および实际的双方の見地から考察することができるのであるが、理論的見地からは、それは言語の科学 (the science of language) である。また实际的見地からは、それは言語の技術である。⁴⁾

言語の理論的研究、すなわち、言語の科学は、*NEG* に従えば、言語の事実と現象を観察し、そしてそれらを組織的に分類記述する記述文法

(descriptive grammar) と、その言語現象の理由と発生を説明する説明文法 (explanatory grammar) に分かれる。説明文法は、歴史文法 (historical grammar)、比較文法 (comparative grammar)、一般文法 (general grammar) の三つから成る。⁵⁾

実用文法 (practical grammar) の主要目的は、NEG に従えば、現代の英国人が文法と辞書の助けを借りて、アルフレッド大王時代の古代英語を学び始める時の様に自国語の初期の時代を含めて、現用あるいは死語であるとを問わず、外国語に熟達させること、もっと正確に言えば、熟達を助けることである。この熟達は、その外国語の書かれた形態あるいは話された形態を理解することのみにしか達しないこともあるであろうし、あるいは、話すこと、書くこと双方の表現力を含むこともあろう。⁶⁾

Sweet は、言語の研究を、上述の様に理論的研究と実際的研究に分け、理論的研究を言語の科学、実際的研究を言語の技術と特徴付けたのであった。この両者の関係について、Sweet は、「良い教授法は、言語学の完全な知識、すなわち、総体的に音声学、音声表記法、種々の代表的言語の文法構造、言語学上の諸問題に基づかなければならない。」⁷⁾ と述べて、言語の実際的研究は、言語の理論的研究に基づかなければならないことを明らかにしている。

時枝誠記は、「一般に語学という語は、術と学とを兼ね意味する。」⁸⁾ 「術は学をその中に含むと同時に、学は又術を前提とすることによって進展するものである。」⁹⁾ と述べて、言語の科学と言語の技術は、不即不離の関係において始めて完成するものであるとしている。

以上の考察によつて、言語の技術としての言語の実際的研究は、言語の科学としての言語の理論的研究に基づかなければならないことが明らかになった。そして言語の理論的研究が取扱う音声言語は、また言語の実際的研究に基づかなければならない音声言語は、文字言語の源であると規定されたのみで、解明されるべき対象として言語学に与えられている。

言語の研究は音声言語に基づかなければならないという Sweet の考えは、今日に至る迄言語研究の基本的な考え方であった。そして現代の言語学においては、言語＝音声言語の図式がそのテーゼとなっている。このことから、音声言語の特質を明らかにするということは、言語学の大きな課題である。

1.1.2. 音声言語の概念

服部四郎博士は、「我々が言語行動をなす場合に、音声を発して相手に聴かせる場合と、文字を書いて相手に読ませる場合とある。これらの行動は単に手段を異にしているというにとどまらないで、相異なる法則に支配されている点もあり、言語体系や言語材料そのものにも相異点の見出されることがあるから、『音声言語』、『文字言語』という名称でこれらの言語現象を区別して表わすことは便利であり至当であると思う。」¹⁰⁾と述べている。このことから明らかな様に、音声言語 (spoken language) は、文字言語 (written language) と対照して考えられる概念である。

伝統的な形式論理学 (formal logic) では、概念は、次の様な概念構成の過程によって形成されんとする。すなわち、思考 (Denken) には、思考する主観 (Subject) と、思考される対象 (Gegenstand) の二要素がある。対象について言い得られる全てのものを規定 (Bestimmtheit) と名付ける。この規定は、三つに分かれる。第一は、「在る」という規定、すなわち存在規定である。第二は、ある属性 (Eigenschaft) を持つという規定、すなわち属性規定である。第三は、対象が他の対象と何等かの関係に立つという規定、すなわち関係規定である。規定が対象に付属していることを対象の事態 (Sachverhalt) と言う。

主観が対象の事態を把捉する作用を思考と言う。思考には、分析 (Analyse), 比較 (Vergleichen), 抽象 (Abstrahieren), 総合 (Synthese) の作用がある。思考のこの作用によつて構成された思考内容を考想 (Gedanke) と言う。考想は、判断 (Urteil), 推理 (Schluß), 概念 (Begriff) の三つに分かれる。判断は、対象とその事態との直接認識 (unmittelbares Erkennen) を表現するものである。推理は間接認識 (mittelbares Erkennen) を表現するものである。概念は、判断、推理によって得られた認識を綜合統一したものである。概念の言語的表現を名辞 (Terminus) と名付ける。¹¹⁾

属性は、事物に属する性質を言う。事物の持つ性質のうち、その性質が事物の存在に対して偶然的付帶的なものを偶有的属性 (akzidentelle Eigenschaft) と言う。これに対して、その性質を否定すれば、事物の存在それ自身も否定されるものを本質的属性 (wesentliche Eigenschaft) と言う。この属性がある対象を他の対象から区別する論理的な徴と考えられ

る場合には、これを徴表 (Merkmal) と名付ける。¹²⁾

属性は、上で述べた様に、偶有的属性と本質的属性に分かれる。偶有的属性は、個別的、偶然的、可変的な性質、すなわち、非本質的な属性である。これに対して、本質的属性は、対象に必然的に帰属する普遍的で、恒存的な属性である。従って、事物の本質は、本質的属性の総体を意味する。これに対して、事物の現象とは、本質的属性と同時に非本質的属性をも含む総体を意味する。この様に、あらゆる事物は、本質と現象との統一物である。現象のうちに本質を見出すことが学問的認識である。¹³⁾

概念を組み立てている徴表の総体を概念の内包 (Inhalt) と言う。徴表が概念のうちに含まれていることを徴表の論理的内在 (logische Immanenz) と言う。徴表の内存は、単なる徴表の総和ではなく、一つの統一的組織を構成する。¹⁴⁾ すなわち、概念の内包を構成している徴表の総体は、特定の結合の仕方、特定の連関を持つ。集合の構成分子の間に何らかの相互関係を考えたものが構造であるから、概念の内包を組み立てている徴表の総体は構造を持っている。

Georg Klaus は、*Einführung in die formale Logik* で、この概念の内包を組み立てている徴表の構造を、 $B (E, F, G, \dots, a, b, c, \dots, x, y, z, \dots)$ と表わしている。すなわち、概念は三つの構成部分を持っている。第一のものは、本質的属性の第一グループを成し、質とも呼ばれているもので、当該事物に必然的に属しており、かつそれは当該事物にだけ属している他の事物に属していないものである。これは種の本質をなすものである。Hegel は、質 (Qualität) について、「或るものが現にあるところのものであるのは、その質によってであり、或るものが、その質を失なうとき、それは現にあるものでなくなる。」¹⁵⁾ と説明している。第二のものは、本質的属性の第二のグループをなし、当該事物に必然的に属してはいるけれども、当該事物に限定されず他の事物にもまた見出されるものである。これは、その種が属する類の特徴を示すものである。第三は、一定の限界内では変化させることも脱落させることもできる非本質的属性である。これは個体を規定するものである。¹⁶⁾

概念が適用される対象の集合をその概念の外延 (denotation) と言う。概念の内包が確定すれば、その外延も確定する。

概念には、明晰な (clear) 概念と判明な (distinct) 概念の区別がある。

明晰な概念とは、概念の外延の面から考察したものである。すなわち、その概念が他の概念との区別が明瞭になっていて、混同されるおそれがないものを言う。判明な概念とは、概念の内包の面から考えたものである。すなわち、その概念を概成しているおのこのの徴表が、内面的に互に明確に区別されている時に、その概念を判明であると言う。

矢田部達郎博士は、明晰と判明を反対に説くのであるが、明晰の原理は、個体が他者から自らを区別する区別化の原理であるとする。これに対し、判明の原理は、個体が自らの内的構造を明らかにする個体化の原理であるとする。従って、明晰の原理は、差異の法則に従い、判明の原理は、類同の法則に従って営まれる。差異と類同とは相関的概念であって、両者の協同によって始めて良形態 (gute Gestalt) が構成される。¹⁷⁾

明晰でない概念を不明な (obscure) 概念と言う。判明でない概念を乱雑な (confused) 概念と言う。概念の不明と乱雑を防ぐために、概念の内包および外延を確定し、明晰にして判明な概念を得ることが、学問の任務である。

音声言語と文字言語は、互に区別される概念である。従って、これらは明晰な概念であると言える。しかし、われわれは、音声言語と文字言語という概念を区別することはできるが、その概念を形成している徴表については、詳細にこれを言うことができない。従って、音声言語と文字言語は、明晰な概念であるが、判明な概念ではない。乱雑な概念である。このことから、音声言語と文字言語は、論理的に厳密な概念構成によって得られたものではないと考えられる。

高山岩男氏は、概念構成に、神話的概念構成、言語的概念構成、論理的概念構成の三つの種類を認める。神話的概念構成は、瞬間的な現前の印象の中から、最も強烈に民族の心を捉える印象が選択されて形成される。神話的概念構成は、量よりも質を中心とし、外延よりも内包を中心とし、現前の印象から全体を生々と顯わにする特徴を捉える働きである。

言語的概念構成は、瞬間的な印象の中に繰り返す持続的なものが強く捉えられ、これを本質的なものとして明確な形態を形成する働きである。従って、言語的概念構成は、神話的概念構成と論理的概念構成の中間に位置する。

論理的概念構成の特質は、直観的な特徴把握でなく、分別的、比量的な

ところにある。個々のものを機能的全体を表出するものとし、この機能的全体を直観的具象性からの抽象によって捉えるところにある。

論理的思考の最も基本的な特徴は、「否定性」にある。与えられた直観的な事物をそのまま受容せず、それを否定し、一度非有または無の立場を経て、しかる後に与えられた直観的な事物を処理する。否定を経、非有を通して有を理解することは、理解される有の直観的所与性を否定すること、換言すれば、剝奪し、括弧に入れることである。更に直観的所与性を剝奪し、括弧に入れる思考は、思考せられる存在または実在の存在性または存在性をも剝奪し、括弧に入れることである。この様な操作を経ることが論理的思考の特徴であり、これによって純粹思考の世界、すなわち純粹論理学を展開することが可能になる。そして、この様に展開される純粹論理の在り方は、「個別」、「特殊」、「普遍」である。これは、個・種・類とも言われる。三者の関係は、空間的に表象される「包摂」(subsumption)の関係である。論理的思考がこの様に、個・種・類の関係で思考することは、法則的に思考することと言える。個々の特殊なものをそのまま個々の特殊なものとして受取らず、その個別性や特殊性を否定して普遍性の立場に立ち、ここから翻って理解することは、個々の特殊なものを法則の実例、類例、場合として理解することである。「法則 (law)」を立て、法則から理解するのが論理的思考の特質である。¹⁸⁾

Ernst Cassirer は、言語的概念 (linguistic concept) は、感覺的経験における、一定の恒常的反復的要素に基づいているとしている。これは、高山氏の説と一致している。そして命名 (denomination) の行為は、この分類の過程に依存している。そして言語的「名」は、それ自体で存在する独立の実体を示すことを意図するものではなく、むしろ人間の興味と目的によって決定されている。このことから、月を示すギリシャ語とラテン語は、同じ物を指示しているのに、同一の意図または概念を表現していないのである。ギリシャ語 *μήνη* は、時を「測定する」月の機能を示し、ラテン語 *luna* は、月の明るさ、または輝きを示している。この様に、同一事物の非常に異なった二つの性質に明らかに孤立した焦点が合わせられた注意が向けられているのである。¹⁹⁾

Cassirer は、更に言語的「名」の特質について、次の様に述べている。すなわち、「物の名は、物の性質に何らの権利も主張しない。それは、

φύσει ὅτι なること、すなわち物の真実をわれわれに与えることを意図しない。名の機能は、常に物の特殊な局面を強調することに限定されており、名の価値が依存するのは正にこの制限、この限定なのである。具体的な事態をあますことなく示すことが名の機能なのではなく、唯ある局面をえり抜き、それを強調することがその機能である。この局面を単独に取り出すことは、消極的な行為ではなくて、積極的な行為なのである。というのは、命名の行為において、われわれは、感覚によって得られた与件の多様と拡散の中から、知覚のある固定した中心を選び出すからである。これらの中心は、論理的または科学的思考におけるものと同一ではない。通常の言語の語句は、科学的概念を表現する基準と同じ基準で判定すべきではない。科学的術語と比較して、普通の言語の語は、常にあるあいまいさを示す。殆ど例外なく、それらは、あまりにも不明瞭で、はっきりしないので、論理的分析のテストには耐えないのである。この避けられない固有の欠陥にも拘らず、日常の語句や名は、科学的概念に至る道の一里塚である。われわれが世界について最初の客観的あるいは理論的見解を受け取るのは、これらの語句においてである。」²⁰⁾

矢田部達郎博士は、論理的概念構成と日常的概念構成について次の様に説明する。すなわち、論理的概念や科学的概念の構成には、多くの経験からその本質的属性と偶有的属性とを区別することが不可欠の前提である。そのためには検証や整理の操作を必要とする。日常生活の事物現象は、多くは十分な自然的斉一性を備えていて、論理的处理を行なわなくても実用に差支えないために、大抵直観的な勘によって概念構成をしているものと思われる。この場合には、論理学で言われる様に、偶有的な過剰規定が振り落されて本質的徴表のみが残されるのではなく、むしろ逆に、概念の内容に新しい性質が付加されるのである。²¹⁾

Jerome S. Bruner は、*A Study of Thinking* で、概念形成 (concept formation) と概念達成 (concept attainment) とを区別する。事物をある意味深いクラスの集合、それらの多様性を秩序づけるために何らかの意味深いクラスの集合に分類する新しいカテゴリーを作り出すことが概念形成である。概念形成は、本質的に概念達成への路線における第一歩である。概念達成は、区別しようと求めているクラスの実例でないものから、実例を区別する断定的な限定的属性を発見する過程を指す。²²⁾

Bruner は、概念の型に、連言的概念 (conjunctive concept)、選言的概念 (disjunctive concept)、相関的概念 (relational concept) の三種があるとする。連言的概念は、数個の属性の適切な価値の共存によって限定される概念である。選言的概念は、幾つかの属性が、それぞれある一つの値を取った時、それらの少なくとも一個の値を持つものである。相関的概念は、限定的属性間の特殊な関係によって限定される概念である。²³⁾

以上の考察から、音声言語と文字言語という概念は、厳密な論理的、科学的概念構成によって得られたものではなく、言語的概念構成、あるいは Bruner の言う概念形成の過程で形成されたカテゴリーと考えられる。従って、言語学の任務は、音声言語と文字言語という乱雑な概念から出発して、音声言語と文字言語の明晰にして判明な概念を求めることである。

言語現象の多様性を秩序づけるために、それを意味深いクラスの集合に分類する新しいカテゴリーである音声言語と文字言語という概念が形成された。言語学の課題は、この二つの概念を区別する限定的属性を発見することになる。

この分類のカテゴリーである音声言語と文字言語は、服部四郎博士の説明でも明らかな様に、手段として音声を用いるか文字を用いるかという基準に基づいている。この両概念を判明な概念にする道は、服部博士も指摘している様に、音声言語と文字言語を支配している法則、言語体系や言語材料の相異などの研究を通じて、音声言語と文字言語の内部構造を明らかにして行くことである。

概念を判明ならしめる方法を論理学では、定義 (definition) と名付ける。定義とは、概念を組み立てている徴表の総体、換言すれば、概念の内包を明確に規定し、概念の外延を確定する手続きである。Bocheński によれば、定義という言葉は、「x とは何か。」という問に対する殆ど全ての答えを指す。²⁴⁾

定義は、実質的定義 (real definition) と唯名的定義 (nominal definition) に分けられる。実質的定義は、定義されるべき概念によって呼ばれる事物のクラスの本質を表現するもので、最近位の類と種差による定義である。近藤洋逸氏は、実質的定義は、被定義項が指示する事物を分析して、その構造や機能を明示する定義で、分析的定義とも呼ばれるとしている。²⁵⁾

唯名的定義は、概念または名辞の使用に関する約束を言い表わしたものである。すなわち、唯名的定義は、ある一定の概念を表示している名辞の解明である。Bocheński は、唯名的定義を統語論的定義 (syntaktische Definition) と意味論的定義 (semantische Definition) に分けている。

統語論的定義は、更に、1. 直接的定義 (direkte Definition), 2. 含意的定義 (implizite Definition), 3. 回帰的定義 (rekursive Definition), 4. 公理系による定義 (Definition durch ein axiomatisches System) の四つに区分される。²⁶⁾

意味論的定義は、分析的定義 (analytische Definition) あるいは辞書的定義 (lexikalische Definition) と総合的定義 (synthetische Definition) に分かれる。分析的定義は、既に成立している記号の意味を規定しようとする時に行われる。分析的定義によって、記号にはそれにすでにどこかで付属させられている意義が、明確に帰属させられる。これに対して、記号に新しい意味が与えられるならば、総合的定義が生ずる。²⁷⁾

言語学の本来の研究は、言葉の意義の説明を目指すのではなく、言語現象の理解を目指す。従って、言語学が求める定義は、実質的定義である。しかし、事象の本質を不完全にしか把握していない場合には、不可能である。この様な場合に、ある程度定義の代用として使用し得る概念規定の定義類似的方法がある。Klaus に従えば、この方法には非論理的なものと同論理的なものがある。

非論理的な方法には、指示 (Hinweis), 記述 (Beschreibung), 特性描写 (Charakteristik), 直喩法 (Methode des Vergleichs), 差別法 (Differenzierung) がある。論理的方法には、分類法 (Klassifikation) と概念分節法 (Begriffsgliederung), および概念分節法の亜種として二分節法 (dichotomische Gliederung) がある。²⁸⁾

Klaus が論理的方法としている分類法と概念分節法は、論理学で普通分類 (classification) と区分 (division) と名付けているものに相当する。また二分節法は、区分の一種である二分法 (dichotomy) に相当する。

定義は、概念の内包を明確に規定することにより、概念の意義を明らかにすることであった。区分は、概念の外延を分解して概念を明晰にし、整頓するものである。区分は、一つ概念を種 (species) に分けることである。分類は、概念の外延を徹底的に区分することにより完全な体系を組織

することである。従って、区分や分類を行なうためには、概念の内包が明らかになっていなければならないことになる。

服部博士は、言語を手段、法則、体系、材料を基準として、音声言語と文字言語に区分した。両者は、相異なる手段、法則、体系、材料を持つとすれば、この区分は意義がある。構造言語学のように、文字言語は文字という手段によって不完全に音声言語を写したものに過ぎないものであって、音声言語が根源的な言語であるという観点に立つならば、音声言語と文字言語という区分は、言語という類概念を種概念に分けたと言えるかどうかは疑問である。

註

- 1) Henry Sweet, *The Practical Study of Language*, p. 49.
- 2) *Ibid.*, p. 49.
- 3) Henry Sweet, *A New English Grammar*, Part I, p. 203.
- 4) *Ibid.*, p. 4.
- 5) *Ibid.*, pp. 1-3.
- 6) *Ibid.*, p. 4.
- 7) Henry Sweet, *The Practical Study of Language*, p. 3.
- 8) 時枝誠記, 「国語学原論」, p. 113.
- 9) *Ibid.*, p. 114.
- 10) 服部四郎, 「言語学の方法」, p. 66.
- 11) 須藤新吉, 「改稿 論理学綱要」, pp. 2-13.
- 12) *Ibid.*, p. 101.
- 13) 花崎皋平, 「本質と現象」, 岩波講座 哲学VII. 「哲学の概念と方法」, p. 128.
- 14) 須藤新吉, *op. cit.*, p. 104.
- 15) Hegel 著, 松村一人訳, 「小論理学」上巻, p. 280.
- 16) Georg Klaus 著, 門上秀叡訳, 「記号論理学」上, pp. 182-183.
- 17) 矢田部達郎, 「心理学序説」, p. 199.
- 18) 高山岩男, 上田泰治共著, 「論理学」, pp. 31-45.
- 19) Ernst Cassirer, *An Essay on Man*, p. 134.
- 20) *Ibid.*, pp. 134-135.
- 21) 矢田部達郎, *op. cit.*, p. 261.
- 22) Jerome S. Bruner, *A Study of Thinking*, p. 22.
- 23) *Ibid.*, pp. 41-43.
- 24) I. M. Bocheński, *Die zeitgenössischen Denkmethode*, p. 90.
- 25) 近藤洋逸, 好並英司共著, 「論理学概論」, p. 18.
- 26) I. M. Bocheński, *op. cit.*, pp. 91-92.
- 27) *Ibid.*, pp. 90-94.
- 28) Georg Klaus, *op. cit.*, pp. 239-244.

1.2. 音声言語に関する諸説

1.2.1. アリストテレスの説

音声言語と文字言語とに関する規定を、先ずアリストテレスに見出すことができる。アリストテレスは、「命題論」(De interpretatione)で、「ところで音声〔声にされる言葉〕(φωνή)のうちにある様態(πάθημα)は靈魂(ψυχή)のうちにある様態の象徴(σύμβολον)であり、書かれたものは音声のうちにある様態の象徴である。」¹⁾と述べている。

ギリシャ語の φωνή は、元来音(sound)の意味であるが、音声(the sound of the voice)の意味でも用いられる。更に話し言葉(speech)や発話(utterance)の意味でも用いられる。πάθημα は、出来事(incident)の意味である。アリストテレスは、靈魂の中の πάθημα は、事態(πράγμα)の類似物(ὁμοιώματα)であると規定している。²⁾ また σύμβολον は、元来割り符(tally)の意味であるが、同一であることの証明に役立つしるし(any token serving as proof of identity)の意味でも用いられる。

従ってアリストテレスのこの説明は、発話は事態の類似物である靈魂の中の出来事と同一であることを証明するしるしであり、文字言語は音声言語の中で言い表わされている出来事と同一であることを証明するしるしであるということになる。アリストテレスは、この説明の中で、言語の諸相を、事態、事態の類似物である靈魂の中の出来事、音声言語、文字言語に分けて、音声言語は、事態の類似物である靈魂の中の出来事の象徴であり、文字言語は、音声言語の中の出来事の象徴、すなわち、靈魂の中の出来事の象徴の象徴と規定しているのである。

ところで、音声言語が靈魂の中の出来事の象徴になり得るのは約束によってであるとして、アリストテレスは、人為説の立場を採る。このことについて、「命題論」で、「ところで名称(ὄνομα)は、約束(συνθήκη)によって意味をもつ(σημαντικός)音声で、時を含まない。(中略)そして『約束によって』というのは、名称のうちのどれ一つ『自然によって』そのようなものであるのではなくて、象徴となる時に、そのようなものであるのだからである。」³⁾と説明している。

古代ギリシャにおいては、言語はさながら事象の本性(φύσις)を表わすという自然説と、言語は、人間の規約(νόμος)に基づくという人為説があった。若し言語が事象と必然的關係にあるとすれば、全ての言語は同一で

なければならない。しかし、「文字がすべての人々にとって同一でないように、また音声も〔すべての人々にとって〕同一ではない。」⁴⁾と「命題論」で述べている様に、事実は全ての言語が同一でないのであるから、アリストテレスは、言語は「約束による」ものであるという立場を採っているのである。

アリストテレスのこの所説から明らかになることは、言語は、靈魂の出来事の象徴であるが、事態 (πράγμα) の直接の象徴ではないということである。言語が象徴する靈魂の中の出来事は、事態の類似物 (ὁμοίωμα) である。ὁμοίωμα とは、よく似た物 (likeness, image) の意味である。靈魂の出来事は、事態とよく似た物であって、事態そのものではない。事態は、靈魂の出来事となることによって、始めて言語によって象徴されるのである。従って、事態、靈魂の出来事、音声言語、文字言語の間の関係は、アリストテレスにあっては、次の図式で示される関係にあると考えられる。

事 態 — 類似物 — 靈魂の出来事 — 象 徴 — 音声言語 — 象 徴 — 文字言語

音声言語は、靈魂の出来事を約束によって言い表わすことによって、間接的に事態を言い表わす。音声言語の象徴である文字言語は、従って、事態を二重に間接的に書き表わすことになる。

靈魂の中の出来事を象徴する言語は、約束の違いによって、様々な国語に分かれる。しかし、言語によって象徴される靈魂の中の出来事は、アリストテレスに従えば、すべての人々にとって同一であり、靈魂の中の出来事がそれらの類似物である事態は勿論すべての人々に同一であるとされる。⁵⁾

アリストテレスは、言語の本質論を「命題論」で論じたのであるが、音声言語の構造に関しては、「詩学」(De Arte Poetica)、第20章で、次の様に記述している。すなわち、言語表現 (λέξις) は、単音 (στοιχείον), 音節 (συλλαβή), 接続的小辞 (σύνθεσμος), 分離的小詞 (ἄρθρον), 名詞 (ὄνομα), 動詞 (ῥήμα), 格 (πτῶσις), 文 (λόγος) から成ると分析する。⁶⁾ この分析された単位の上に、音韻論, 形態論, 統語論の原型を展開する。形態論には、品詞論, 語形変化論, 造語論が含まれる。

音韻論には、単音の定義, 種類, 調音音声学的分析, 音節の構造が含まれる。単音は、不可分な特別な音であると定義される。単音には、母音 (φωνή), 半母音 (ῥιμίνφωνον), 子音 (ἄφωνα) の三種がある。単音は、発

音される時の口の形，調音点，氣息の有無，音の長短，アクセントの違いによって異なる。音節は，子音と母音または半母音から構成される。

形態論については説明を省略するが，文については，「文 (λόγος) とは，合成されてできている意味を持った音声であって，それを構成しているいくつかの部分がそれ自身単独で，何らかの意味をもっているところのものである。かならずしもすべての文が，動詞と名詞が一緒になってできているとはかぎらない。たとえば、『人間』の定義を示す文のような場合もあるのであって，動詞がなくても文は成立しうるのである。」⁷⁾ と述べている。

アリストテレスは，「詩学」においては，言語学的見地から，音声言語を構造分析したのであったが，「弁論術」(Ars Rhetorica) では，コミュニケーションと文体論の見地から，音声言語の一つである弁論と文字言語を分析している。

アリストテレス時代のギリシャでは，弁論は，多くは文字で書かれた原稿に基づいてなされたものであった。その原稿の文章は，語られることを前提として書かれなければならないので，読まれるための文体と，弁論のための文体を峻別して，アリストテレスは，言語表現 (λέξις) を，文字的言語表現 (γραφικὴ λέξις) と討論的言語表現 (ἀγωνιστικὴ λέξις) に分ける。この両者を比較して，その特質について，アリストテレスは，「専門の文章家の言論は，実際の討論では貧弱に見える。これに対して，弁論家のそれは，語られるのを聞くと見事だが，手にとって読まれると素人くさい。」⁹⁾ と述べている。「命題論」では，音声言語は，靈魂の中の出来事の象徴であり，文字言語は，音声言語の象徴であった。しかし，耳に訴える音声言語と，目に訴える文字言語の効果は，上述の様に異なるのである。この効果の相違が生ずる理由として，アリストテレスは，実際の討論においては，演技が伴うが，この演技が取り除かれると，討論的言語表現はその本領を発揮することができなくて，愚かしいものに見える」と説明する。¹⁰⁾ この指摘は，音声言語と文字言語を区別する基準として重要な項目の一つである。

アリストテレスに従えば，言論 (λόγος) には，語り手，題目，聞き手の三つの要素がある。¹¹⁾ そして，言論の目的は，聞き手に向けられ，その判定のためにある。¹²⁾ 弁論術 (ῥητορικὴ) は，聞き手に従って三種に分かれる。すなわち，討論的言語表現は，民会的言語表現 (δημηγορικὴ λέξις)，法

延的言語表現 (*δεικτική λέξις*), 演示的言語表現 (*ἐπιδεικτική λέξις*) の三種に下位区分される。¹³⁾

討論的言語表現の中では、朗読されるための言語表現が最も文書的である。法廷的言語表現が次にそうである。¹⁴⁾ この様に、音声言語の中にも、文字言語に近いものから隔たっているものがある。

以上概観した様に、アリストテレスは、「命題論」において、言語の本質を論じて、音声言語と文字言語の関係を明らかにした。また「詩学」においては、表現の立場から、言語学的な分析の上に立って文体の問題を論じている。そして「弁論術」では、コミュニケーションの過程として、語り手、題目、聞き手の三要素を分析した上で、説得の手段、表現、言語の各部分の配列について詳述している。

1.2.2. Hegel の説

Hegel は、*Philosophische Propädeutik* で、言語を想像力 (*Einbildungskraft*) の偉大な産物であると規定している。¹⁵⁾ そして言語を音声言語 (*Tonsprache*) と文字言語 (*Schriftsprache*) に分ける。¹⁶⁾

Hegel に従えば、音 (*der Ton*) は、内面が一時的に現象したものである。しかしこの内面の発現は、それが単に外面的なものになるということだけではなく、音によって、内面は本質的に何かを意味する主観的なものであり、内面的なものであることを表現する。音の分節 (*Articulation der Töne*) によって色々のニュアンス〔規定〕を持つそれぞれの心像 (*Bild*) が表わされるのみでなく、また抽象的な色々の表象 (*Vorstellung*) も表わされる。具体的な表象は一般に言葉という記号 (*Wortzeichen*) になることによって心像のないものになる。というのは、そこで心像〔表象〕は、記号に同一化されるからである。心像は抹殺されて、言葉が心像を代表することになる。¹⁷⁾ Jean Piaget は、行動の世界が言語の世界で置き換えられることを、敷き写しの法則 (*loi du décalage*) と名付けた。Hegel においては、心像、表象が言葉に置き換えられるのである。

Hegel は、音声言語が思想の記号であるのに対し、これらの記号に対し更に記号となるものが文字言語であると文字言語を規定している。この規定は、文字言語を音声言語の象徴であるとするアリストテレスの規定と軌を一にする。Hegel は、文字言語を、象形文字によるものと、アルファベット文字によるものに分ける。象形文字は、発声記号と全く関係のない

対象を表示する。アルファベット文字は、一々の音を表示するものであるとする。¹⁸⁾

「精神哲学」においては、Hegel は、音声言語を根源的な言語として考えている。¹⁹⁾ 音は、自己を公示する内面性の外化が充実されたものである。言語記号は、直観の一層真実な形態なのであるが、この形態は時間中の現存在、存在すると同時に消滅する現存在である。一定の表象に適合する様に自己を更に分節する音、すなわち話 (Rede) と、その体系、すなわち、言語とは、諸感覚・諸直観・諸表象に対して、第二の現存在、それらのものの直接の現存在よりは一層高次の現存在、一般に表象界において認められている現存在を与えるとする。²⁰⁾

文字言語について、Hegel は、「精神哲学」においては次の様に述べている。すなわち、「書写言語は単に、或る外面的に実践的な活動の助けを借りる言語が、特殊な領域でなしとげたところのいっそう発展した一形式の進行にすぎない。書写言語は、直接的空間的な直観作用の分野に進んで行って、その分野で記号を取り上げたり作り出したりする。さらに、象形文字書法は諸表象を空間的図形によって記号化し、字母書法はそれに反しそれ自身すでに記号である音によって記号化する。それ故に字母書法は記号の記号から成立している。そしてこのことはもとより、字母書法は音標言語がもっているもろもろの具体的記号を、すなわちもろもろの言葉をその単純な諸要素に解消し、そしてこれらの要素を記号化するという仕方で行われる。」²¹⁾

Hegel は、アルファベットは、音声言語における感性的なものが、意識にもたらされ、反省の対象にされ、分節する際の唇の身振り、上顎の身振り、舌の身振りの単純な少ない諸要素に還元されて、一般性の形式にもたらされたものであるとしている。この意味において、「字母書法は、自己自身においていっそう知的であるとされる。」²²⁾ これに対して、象形文字言語は、字母書法と違って、感性的な諸記号を直接に分析することから発生するものではなく、それに先行して諸表象を分析することから発生するものであるとしている。²³⁾

以上概観した様に、Hegel は、音声言語を根源的な言語として把え、その特性を時間性にあるとする。そして音声言語は、アリストテレスと異なり、表象よりも一層高次の現存在であると考え、これに対して文字言語

の特性は、空間性にあるが、アルファベット文字に基づく文字言語は、音声言語の記号であるのに対し、象形文字に基づく文字言語は、空間図形による表象の記号化であるとしている。

1.2.3. Wilhelm von Humboldt の説

言語は根源的に音声言語であるという考え方は、Hegel の同時代人である Wilhelm von Humboldt によっても明確に表明されている。Humboldt は、*Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts* で、言語を談話 (Rede) の全体と規定している。談話は、分節された音声を思想の表現に高める精神の永遠に繰り返される労作である。この意味において、言語は所産物 (Ergon) でなく、むしろ活動性 (Energeia) である。²⁴⁾ Humboldt は、言語を言語活動から切り離された、概念と音声の連合した固定した存在、すなわち言語体系としてではなく、言語活動において、概念と音声を連合させる創造的活動として捉えているのである。

このことは、「言語の本質的内面的なる目的は暗い混乱せる表象を、明確な概念を表示する言葉のうちに客観化することである。ところでこの客観性は、概念と言葉が他の同じく自発的な存在によっても同様に理解されるという確証が応答からして生ずるときに、初めて完全となる。」²⁵⁾ という説明からも明らかである。この説明は、言語活動は、話し手の創造活動であると同時に、聴き手の側の創造活動をも含むものであることを明らかにしている。感性的印象と自発的精神運動は、音声の分節によって明確な概念に形成されるのである。²⁶⁾

この意味において、言語は思想の形成的機関である。全く精神的、内面的であって、いわば跡方なく消えて行く知的活動は、音声を通じて文として表現され、感官に知覚され得るものとなる。知的活動と言語とは、従って一つであり、相互に不可分離である。知的活動はしかし自身においても音声に結びつかねばならぬ必然性を有している。さもないれば思惟は明瞭になり得ないし、表象は概念になることができない。²⁷⁾

従って、言語なくしては、いかなる概念も可能でなく、心にとってはまたいかなる対象も存在しない。つまりいずれの外的対象といえども、ただ概念の媒介によってのみ心にとって完全な本質性を得るからである。対象に関するあらゆる種類の主観的知覚は、必然的に言語の形成と使用とに移

って行く。言葉はこの知覚から生ずるもので、対象自体の模写ではなく、むしろ対象について、心のうちに生産される形象の模写である。²⁸⁾ 言語は決して対象を表現するものではなく、精神が言語生産活動において自発的に対象について構成する概念を表現するものである。²⁹⁾

アリストテレスにあっては、概念は事態の類似物であり、言語は概念の象徴であった。Humboldt にあっては、感覚、表象が言語生産活動によって明確にされ、概念にまで高められ、音声の分節作用により表現されるものである。

またアリストテレスにあっては、事態や概念は全ての民族にとって同一であるとされるが、Humboldt にあっては、概念は、民族に内在する精神力によって助成されあるいは阻止され異なるものである。言語の相違はこの事実に基づく。³⁰⁾ この意味において、言語は民族の精神の外的現象であり、民族の言語はその精神であり、また民族の精神はその言語である。³¹⁾

Humboldt は、「言語の文書による保存でさえも常に不完全なミイラのごとき保存にすぎないのであって、結局更めてそこに生きた言語の具象化されることが必要である。」³²⁾ と述べて、文字言語は音声言語化されることによってのみ言語になり得るとしている。

1.2.4. Hermann Paul の説

Humboldt の上述の考え方は、Heymann Steinthal を通じて Hermann Paul に受け継がれている。Paul は、*Prinzipien der Sprachgeschichte* で、「書かれたもの (das Geschriebene) は、言語自体ではなく、文字に移された言語は、それに期待できるのは、まずその前に、元に移し換える必要があるということに絶えず留意することは言語研究者にとっては大切なことである。」³³⁾ と述べて、文字言語は音声言語化されなければ、言語になり得ないことを指摘している。Paul は、音声言語の特性は連続性であり、文字言語のそれは非連続性であるとしている。³⁴⁾

Paul は、言語研究の対象は、即座に音を立てて過ぎ去る生きた談話であるとする。語をこの談話の一部ではなく、独立したものと看なしたり、文字言語から出発することは、誤りに導くと指摘する。³⁵⁾

Paul は、音声言語に自然的言語 (natürliche Sprache) としての方言 (Mundart) と、人工的言語 (künstliche Sprache) としての標準語 (Gemeinsprache) を区別する。標準語は、抽象 (Abstraktion) であり、

どの様に話すべきかを示す一つの理想的規準にすぎないとする。³⁶⁾ この標準語の規準は一地方、一都市の教養ある人の話し言葉 (gesprochene Sprache) と書かれた文献 (niedergeschriebene Quellen), すなわち、文語 (Schriftsprache) によって規定される。³⁷⁾ この様にして、国民的な標準語は、同時に文語であり口語 (Ungangssprache) でもある。³⁸⁾

Paul によれば、個々の個人的な言語とこの規準との関係は、常に推移が生ずる。第一に、学校で本来の意味の文語と、文語に接近した口語を習う。第二に、人工言語は、自然言語に影響を及ぼし、人工言語から、語、時々語形変化形式や文章構成法を借用する。第三に、人工言語と自然言語とを同時に話す個人にあっては、前者は後者を犠牲にしてその使用範囲が拡大される。更に、人工言語は、書かれた記録による公開の講演、説教、授業等に用いられる。そして多数の個人が専らあるいは主として人工言語を使用するに至ると、若い世代の人々の特に人工言語の影響を受けている部分は、人工言語であったものを最初から一つの自然的言語として修得するのである。³⁹⁾

Paul にあっては、理念的には、言語は音声言語である。しかし Paul も指摘している様に、実際の言語にあっては、標準語を話す場合には、その標準語が文字言語の規制を受けているのであるから、文字言語に接近した音声言語になる。また書かれた記録による公開の講演、説教、授業等は、直接文字言語に基づいた音声言語である。この様に見て来ると、音声言語には、最も音声言語の特質を持つ自然言語から最も文字言語に近い講演、説教等に至る段階が存在することになる。

1.2.5. Henry Sweet の説

Henry Sweet は、その著 *A New English Grammar* の序文において、「序説で、少なくとも歴史の節において、他のいかなる書物よりも H. Paul の *Prinzipien der Sprachgeschichte* に負う所が多い。」⁴⁰⁾ と述べていることから窺える様に、Paul の影響を強く受けている言語学者である。

Sweet は、既に述べた様に、文字言語の真の源をなしているのが音声言語であるという観点から、理論的實際的を問わず、言語の研究はすべて音声言語に基づかなければならないと主張する。この考え方は、Sweet の言語の定義、すなわち、「言語は、語に結合された単音 (speech-sound) による観念 (idea) の表現である。」⁴¹⁾ の根底をなしている。

Sweet は、言語に形態的な面 (formal side) と論理的な面 (logical side) の二つの側面を認め、形態的な面の研究は、音声学に基づき、論理的な面の研究は、心理学に基づくとする。⁴²⁾ しかしこの両面の関係が言語現象なのであるから、文法は形態と意味を別々に取扱うのではなく、両者の関係を取扱うものであるとする。⁴³⁾

Sweet は、Paul と同様、音声言語に方言 (dialect) と標準語 (standard language) の区別を認める。また非地域的方言として、上品な話し言葉 (refined speech) と下品な話し言葉 (vulgar speech) の言語の階層 (strata of language) を区別している。⁴⁴⁾ 更に、音声言語に文語体 (literary language) と口語体 (spoken or colloquial language) を区別する。文語体は、口語体にその起源を持っており、現代の口語体と異なる全ての文語体は、前の時代の化石化した口語体 (fossilized colloquialism) である。古風な文語体の保存は、それが同時に文字言語であることによって大いに助けられてはいるがと断りながらも、文語体と口語体の区別は、書き言葉 (writing) に基づくものではないとしている。⁴⁵⁾

Sweet の方言と標準語の区別、言語の階層の区分、文語体と口語体の区別は、音声言語という概念を組み立てている徴表を明らかにするものであり、それだけ一層音声言語の概念を判明にするものである。

Sweet の言語研究における音声言語の重要性の強調は、Sweet 自身が卓越した音声学者であったばかりでなく、言語の形態的な面を構成する音声进行研究する音声学が先ず言語の科学として確立したという時代的背景もあると考えられる。

1.2.6. Ferdinand de Saussure の説

Ferdinand de Saussure は、*Course de linguistique générale* の序説において、「言語 (langue) と文字 (écriture) は、別の二つの記号体系である。後者の唯一の存在理由は、前者を表記することにある。言語学の対象は、書かれた語と話された語との結合であると定義すべきではない。後者はそれだけで言語学の対象を構成するのである。」⁴⁶⁾ と述べて、言語学の対象は音声言語であることを明確にしている。Saussure においては、文字言語は、音声言語の表記されたものとして第二義的な価値を持つに過ぎない。

1.2.7. Harold E. Palmer の説

Harold E. Palmer は、Sweet と Saussure の影響を強く受けている学者である。「外国語教授および学習において守るべき原則を決定する公理十条」(Ten Axioms governing the main principles to be observed in the Teaching and Learning of Foreign Language) の公理 2 で、Palmer は、言語を言語体系 (language as code) と言語運用 (language as speech) に分けている。これは Saussure の言語活動 (language) を言語 (langue) と言 (parole) の二面から組織されるという理論に基づいているものである。

「英語教授の新問題」(Memorandum on the Problem of English Teaching in the Light of a New Theory) で述べられた Palmer の定義によると、言語体系とは、共通の理解を確保するために、言語運用の使用者の社会化された集団によって採用された組織化された約束の総体である。言語運用とは、一個人が他人に一定の概念 (すなわち、思想、概念あるいは感情) を (身振り、言語音、あるいは文字記号によって) 伝達する (communicate) 際に含まれる心的 (mental) および身体的活動 (physical activities) の総体である。

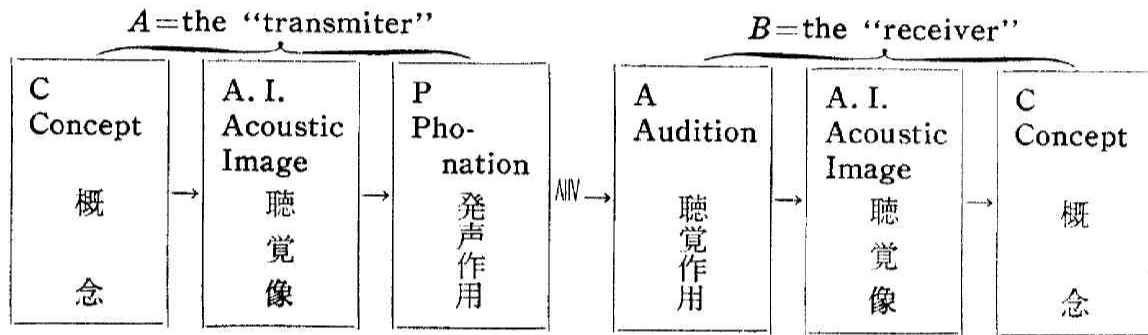
言語運用は、更に第一次伝達 (primary speech) と第二次伝達 (secondary speech) に分かれる。Palmer の定義によると、第一次伝達とは、幼児が組織的教育訓練を受けないで (すなわち、読み、書き、翻訳、分析、総合、その他の類似する理知の働きなしで) 正常な言語的発達の中で普通に行われる言語活動 (speech activity) を指す。これは、すなわち、音声言語の言語活動になる。第二次伝達とは、幼児の正常な言語的発達の中で通常行われるものではなく、組織的教育訓練によって始められ発達する言語活動を指す。これは、すなわち、文字言語の言語活動である。

Saussure にあっては、言語 (langue) は言語活動 (language) の社会的部分であり、言 (parole) を成り立たせる本質的部分である。言語活動の研究は、言語を対象とする言語の言語学 (linguistique de la langue) と言の言語学 (linguistique de la parole) の二部門を含むが、固有の意味の言語学は、言語の言語学である。これに対して Palmer は、外国語学習の立場から、言語 (langue)、すなわち、言語体系 (language as code) よりも言 (parole)、すなわち言語運用 (language as speech) を考察の対

象としたのである。

言語行為 (act of speech) は、伝達にあるのであるが、この過程は言語伝達経路 (speech circuit) と名付けられる。これは、Saussure の言の回路 (circuit de la parole) の考えを援用したものである。言語伝達経路は、口述・聴取経路 (speaking-hearing circuit) である第一次伝達経路 (primary speech circuit) と、書写・読解経路 (writing-reading circuit) である第二次伝達経路 (secondary speech circuit) に分かれる。第二次伝達経路は第一次伝達経路に依存している。⁴⁸⁾

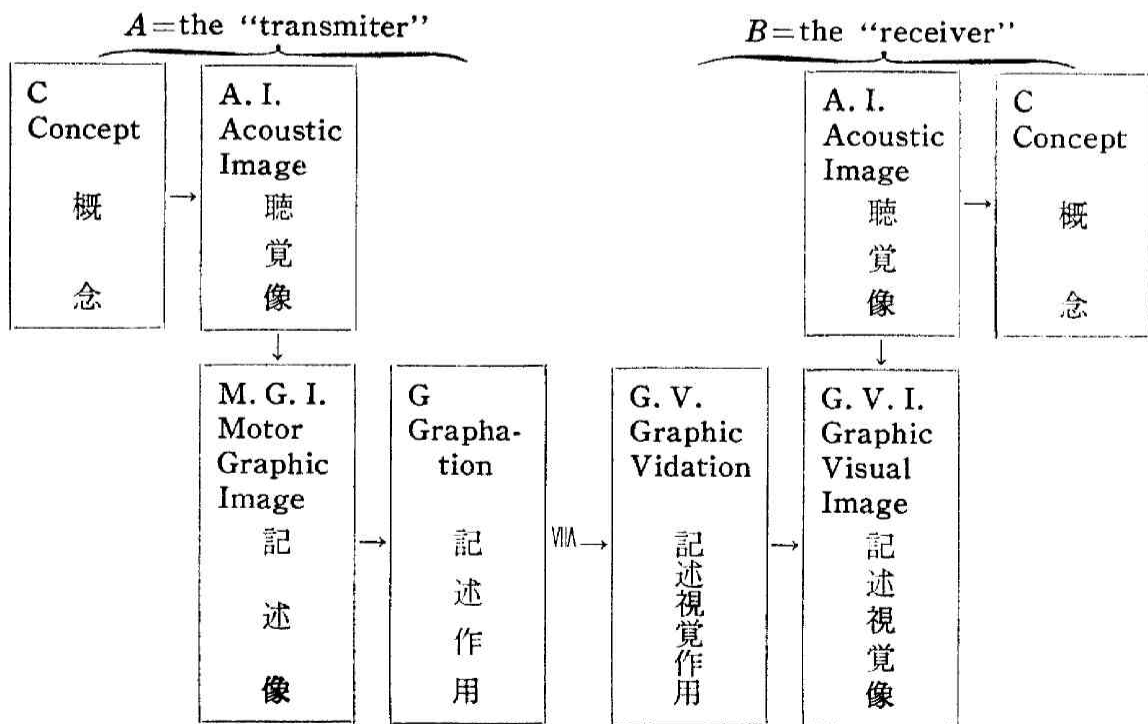
Palmer は、第一次伝達経路を次の様に図示している。



また第二次伝達経路を次の様に図示している。

The First of the Secondary Speech Circuits:

(i.e. the writing-reading circuit)



以上の考察で明らかになった様に、Palmer にあっては、音声言語と文字言語は、言語運用の中に位置付けられている。音声言語は、第一次伝達経路によって行われる第一次伝達である。そして文字言語は、第二次伝達経路によって行われる第二次伝達である。更に言語運用の定義を援用して定義すれば、音声言語とは、一個人が他人に一定の概念を身振り、音語音によって伝達する際に含まれる心的および身体的活動の総体ということになる。また文字言語とは、一個人が他人に一定の概念を文字記号によって伝達する際に含まれる心的および身体的活動の総体であると定義され得る。音声言語を特長付けるものは、言語音 (articulation) と第一次伝達経路である。文字言語を特長付けるものは、文字記号 (writing sign) と第二次伝達経路である。

Palmer は、*A Grammar of Spoken English* の序説で、口語英語 (spoken English) と文語英語 (written English) について、上で考察したのとは異った基準で定義を与えている。この定義によると、口語英語とは、「(とりわけ英国南部の) 教養ある人が普通の会話や親しい友人に手紙を書く際に一般的に用いられる種類の英語」である。また文語英語とは、「印刷された本、評論雑誌、新聞、形式ばった手紙、演説、あるいは(特に見知らぬ人の間で交わされる) 形式ばった会話に用いられる種類の英語」である。⁴⁹⁾ この定義は、言語体系の観点からなされているものである。

以上考察した様に、Palmer は、Saussure の理論に基づいて、言語体系と言語運用の区分を行なった。言語体系においては、口語体と文語体の区別がある。言語運用においては、第一次伝達、すなわち、音声言語と、第二次伝達、すなわち、文字言語の区別がある。言語運用は、伝達の過程の全体である。従って、伝達の過程の中には、伝達経路の図で明らかな様に、概念と聴覚映像とが連合する場所、すなわち Saussure の言語 (langue) である言語体系が、その中に含まれている。

1.2.8. Edward Sapir の説

Edward Sapir は、その著 *Language* で、言語を、「第一義的には聴覚的な (auditory) 記号体系 (system of symbols)」⁵⁰⁾ と定義している。しかし言語の記号体系 (speech symbolism) は、移写 (transfer) が容易であるから、単に言語音 (sound of speech) だけでは言語の本質的事実を

なさない。言語の本質的事実は、概念の分類 (classification) に、概念の形式的型式化 (formal patterning) に、概念の関連付け (relating) にあるとする。⁵¹⁾

Sapir は、言語の移写 (linguistic transfer) の可能性は、殆ど無限であるとする。従って文字言語は音声言語と等価物であるとして次の様に述べている。すなわち、「文字言語 (written language) は、従って数学的表現を借りれば、その話された相対物と点一点の等価物である。書かれた形態は、話された形態の二次的記号——記号の記号——である。しかも対応が非常に密接であるので、文字言語は、理論上のみならず、実際上も目で読む者にとっては、また恐らくある種の型の思考においては、全く音声言語の代用になり得るのである。」⁵²⁾

1.2.9. Leonard Bloomfield の説

言語は、第一義的に音声言語であるという見方は、アメリカ構造言語学においては、その基本になっている。Leonard Bloomfield は、その著 *Language* で、この見方を、「書かれた形態 (writing) は、言語ではなく、唯可視的記号による、言語を記録する手段に過ぎない。」⁵³⁾、「言語学者にとっては、書かれた形態は、ある些細な問題を除けば、蓄音機を使用する様に、過去の時代の話し言葉 (speech) のある特徴をわれわれの観察のためにたまたま保存する単なる一つの形式的な考案物 (an external device) に過ぎない。」⁵⁴⁾ と述べて言い表わしている。

Bloomfield は、話し言葉 (speech) を媒介とする反応を、 $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ と図示する。話し言葉は、 $r \dots s$ の部分、すなわち、話し手の調音運動 (vocal movements) と音波 (sound waves) と聞き手の耳の鼓膜の振動による神経への影響から成る。すなわち、調音運動という生理的過程、音波という物理的過程、耳の鼓膜の振動による神経への影響という生理的過程に分析される。そして、 $s \dots r$ という言語行為 (art of speech) に先立つ実際の出来事 (S) と言語行為に引き続く実際の出来事 (R) は、実際の出来事 (practical event) として、言語行為から区別される。言語行為は発話 (utterance) と名付けられる。そしてある言語社会 (speech community) でなされ得る発話の総体が、その言語社会の言語 (language) である。⁵⁵⁾

Bloomfield は、言語学の対象を発話、すなわち、 $r \dots s$ に限定して、

その構造が、音素、形態素、語、句、文の形式 (from) から成るものと分析する。

Bloomfield は、発話の構造分析の外に、複合的言語共同体 (complex speech-community) における話し言葉の型を五つに分類している。その第一は、文語標準語 (literary standard) で、最も形式ばった談話 (the most formal discourse) と書き言葉に用いられる。第二は、口語標準語 (colloquial standard) で、特権階級の話し言葉である。第三は、地方的標準語 (provincial standard) で、中産階級の話し言葉で、口語標準語に近いが、地方地方で異なる。第四は、亜標準語 (sub-standard) で、下層中産階級によって話される。分布状態は異なるが、甚だしい地域差はない。第五は、地域方言 (local dialect) で、最も恵まれない階級によって話され、村々によって異なる。⁵⁶⁾

1.2.10. Charles F. Hockett の説

Charles F. Hockett は、*A Course in Modern Linguistics* の序説で、音声言語と文字言語を区別すべきことと、音声言語は文字言語よりも一層根源的であるとして次の様に述べている。すなわち、「言語学者は、言語 (language) と書き言葉 (writing) とを区別する。一方非専門家は、この二つのものを混同する傾向がある。非専門家が音声言語 (spoken language) と文字言語 (written language) という用語を用いるのを見ると、話し言語 (speech) と書き言葉 (writing) は、基本的に同じものの唯二つの相異なる表示に過ぎないと思われる。非専門家は、よく書き言葉 (writing) は話し言葉 (speech) よりもどういうわけか一層基本的であると考え。大方逆が真である。」⁵⁷⁾

Hockett は、音声言語が文字言語よりも一層基本的である根拠として、次の二点を挙げている。すなわち、1) 人類は、非常に長い間話して来ているが、文字言語は最近の発明である。2) 小供は、読んだり、書いたりすることを学ぶよりも早い時期に言語を話すことを学ぶ。そして前者によって与えられる枠組の中で後者の技能を獲得する。⁵⁸⁾

Hockett の上で引用した所説は、何ら新しいものを含んでいない。しかし幾つかの問題を提起するものである。第一の問題は、何故言語学者は言語 (language) と書き言葉 (writing) とを区別するかということである。第二の問題は、音声言語 (spoken language) と話し言葉 (speech)、文字

言語 (written language) と書き言葉 (writing) の関係である。

Hockett は、何故言語学者は、言語 (language) と書き言葉 (writing) とを区別するかという問題に対しては、何も説明はしていない。このことについて、Henry Allan Gleason, Jr. は、*An Introduction to Descriptive Linguistics* の第25章で、「文字によるコミュニケーション (written communication) と音声によるコミュニケーション (spoken communication) とを明確に区別しなければならない。言語を無差別に双方を指すために用いる一般的傾向のために、非専門家の間のみならず、専門の言語学者の間にも容易ならぬ混乱が頻繁に起ったので、明示的に条件をつけてさえも、言語をいかなる文字符号体系 (written code) にも用いることを嫌う人が多い。多くの言語学者は、書き言葉の全ての形態 (all forms of writing) を全く言語学の領域外であると考え、言語学を音声言語 (spoken language) のみの考察に限定しようとするものである。」⁵⁹⁾と述べている。Gleason がここで指摘している言語学者の間に起った容易ならぬ混乱は、何を指すのか、この説明だけでは不明であるが、Bloomfield と Saussure の中にその説明を見出すことができる。

Bloomfield が、*Language* の中で指摘している例によると、18世紀の学者は、言語音と文字記号を混同したために、書物や上流階級の会話の言葉の形態は、より古く、より純粋なレベルを代表しており、このレベルから民衆の卑俗語 (vulgarism) が言語の退化 (linguistic decay) という過程による訛 (corruption) として分岐したと信じたのである。⁶⁰⁾

Saussure は、音 (son) と文字 (lettre) の区別をしなかったために誤りに陥った例として、Jacob Grimm の子音推移 (Lautverschiebung) の法則における誤りを挙げている。⁶¹⁾ すなわち、摩擦音 (Spirant) の *t* を *th* と書く書法のために、Grimm は、この音が二重音であるのみならず帯気閉鎖音 (Aspirata) であると信じた。そのため「印欧語の無声閉鎖音 (Tenuis) がゲルマン語の摩擦音になる。」というべきところを、「ゲルマン語の帯気閉鎖音になる。」と説いたのである。

音声言語と文字言語を区別しなければならない他の理由を服部四郎博士の論文に見出すことができる。服部博士は、「文字言語作品は、書き手の音声言語が基礎となって、その上に文字言語としての規範や異なる文体の文字言語の模倣等が重なっている。それらの要素を分析的に考察しないで

ただ全体をまとめて取扱い明瞭な体系を把握し得ないでいる文法書の提供する知識は、十分科学的であるとはいえない。我々が音声言語の研究を勧めるのは、異質的な文字言語は取扱いが厄介だから我々の研究から除外しよう、というのではない。科学的観察は性質の比較的単純なものから始めるのが有利だからである。音声言語の研究によって到達し得た一層体系的な知識を基礎として、文字言語の文法研究に進むならば、後者の知識を一層科学的とすることができるであろう。」⁶²⁾と述べている。服部博士は、文字言語は音声言語を基礎としていることと、音声言語は文字言語に比較してより単純であるので研究に有利であるという二点を、言語学が先ず音声言語を対象にする理由としている。

服部博士の第一の論点は、既に Paul によって指摘された如く、標準語は文字言語の規制も受けているのであるから、必ずしも文字言語は音声言語を基礎としているとは言えない。

また第二の論点については、服部博士が、「音声言語は、どの民族でも、どの国家でも、地域的な差がある。」⁶³⁾、「文字言語も書き手の方言が多少は反映するが、各地を通じて音声言語よりもはるかに一様であり共通である。」⁶⁴⁾と述べているところからも、方言の点一つ取り上げて見ても、音声言語が文字言語に比較してより単純であるとは言い切れないのである。

文字言語が必ずしも音声言語を基礎とせず、また音声言語は必ずしも文字言語と比較してより単純でないにも拘らず、音声言語と文字言語を区別する必要があるのは、音声言語と文字言語は、共通する点も勿論あるが、その形態と機能において異なる点を持ち、同一の方法論では取扱うことができないからである。従って、音声言語と文字言語を区別することは、このことによってそれぞれに適した方法論を確立し、また未知の因子の数を減ずることができるという点で必要なことである。

音声言語 (spoken language) と話し言葉 (speech), 文字言語 (written language) と書き言葉 (writing) の関係については、Hockett は、spoken language=speech, written language=writing と考えている様である。

speech は、Bloomfield の定義に従えば、r……s と図示される部分である。これは調音運動 (vocal movements) B1, 音波 (sound-wave) B2, 聴取 (hearing) B3 から成るものである。Bloomfield は、r……s を、act of speech, speech event, speech-occurrence, speech-utterance 等

とも名付けている。Hockett は、B1 を motion of speech または articulation, B2 を speech signal と名付けている。

writing は、Bloomfield に従えば、可視的記号による言語を記録する方法である。writing は、speech における sound-wave, speech signal に相当する。このことは、writing には、speech に含まれる発話運動と聴取に相当する部分が含まれないことを意味する。

1.2.11. Henry Allan Gleason, Jr. の説

これまでに考察した様に、言語学は Saussure 以後、言語を音声言語に限定し、その内部構造の分析を中心に精密化して来た。このことについて、Gleason は、言語学は、言語をその内部構造 (internal structure) の観点から理解しようとする学問であると規定している。⁶⁵⁾ この内部構造の分析の対象は、これまでの考察によれば、三つの立場があった。すなわち、Saussure の様に、言語活動から切り離された言語 (langue) がその対象であるとする立場、Palmer の様に、言語運用 (language as speech) がその対象であるとする立場、Bloomfield の様に、観察可能な r……s の部分、すなわち speech がその対象であるとする立場がそれである。そしてこれらの立場に共通することは、言語は第一義的に音声言語であるということである。

André Martinet も言っている様に、言語の本質的機能は伝達 (communication) である。⁶⁶⁾ この伝達の機能に着目する時、音声言語はその一つの方法に過ぎなくなる。文字言語も言語としてこの伝達の機能を持ち、そして独自の構造を有していると考えられる。

Gleason は、*An Introduction to Descriptive Linguistics* の第23章で、言語を伝達に用いられる統合された体系として眺める必要性を次の様に説明している。すなわち、「言語は、これまで考察して来た様に、様々な種類の構造から成る複合体である。ある言語の分析は、様々な部分を切り離すことによって進めなければならないが、言語を完全に理解することは、それらの部分が互いに無関係な孤立した項目として放置されているならば得られるものではない。様々な要素が意味があり、興味があるのは、専らそれらが結合されて伝達に用いられる一つの統合された体系になるからである。言語のこの機能によって、言語が幾分なりとも全体として眺め得る枠組を与えられる。この様な言語に対する研究方法が良い結果をもた

らすのは、伝達は言語よりもずっと広範な過程であるからである。』⁶⁷⁾

Gleason は、音声言語と文字言語との関係について、文字言語 (written language) は、基本的には音声言語 (spoken language) の表示 (representation) であるが、それが正確な反映になっていることは極めてまれであると述べている。そしてこれらの差異は、構造の全てのレベル、すなわち音韻論、統語論、語彙、および文体に見出されるとする。⁶⁸⁾ このことから、Gleason は、音声言語と文字言語との間には密接な関係があり、双方を取扱うのに用いられ得る同じ研究方法が沢山あるが、この両者を明確に区別することが絶対に必要であるとする。⁶⁹⁾

Gleason は、話し言葉 (speech) による伝達の全体系 (total system) を音声言語 (spoken language) と定義する。また書き言葉 (writing) に基づく伝達の全体系を文字言語と定義している。⁷⁰⁾ そして、音声言語の構造と文字言語の構造との間の諸関係を適合 (fit) と名付けている。⁷¹⁾

Gleason は、コミュニケーションに関して定義を与えていないが、一般的にコミュニケーションとは、記号による意味の共有の過程、より具体的には、一定の意味内容を記号を媒介として一つの個体から他の個体に伝達する道程を指す。⁷²⁾ この伝達の過程 (communication process) は、Saussure の言の回路 (circuit de la parole) や Palmer の言語運用の定義、言語伝達経路 (speech circuit) に既に現われていた。Sapir の言語の移写の無限の可能性も伝達の枠組で考えるとその意味する所が明瞭になって来る。

Gleason の音声言語の定義は、「話し言葉による伝達の全体系」であった。またコミュニケーションの定義は、「一定の意味内容を記号を媒介として一つの個体から他の個体に伝達する道程」であった。コミュニケーションの定義を Gleason の音声言語の定義に挿入してみると、Gleason の音声言語の定義に用いられている「話し言葉 (speech)」は Bloomfield の speech ではなく、「言語音声 (sound of speech)」と限定して考えなければならない。この様に話し言葉 (speech) を言語音声 (sound of speech) に限定すると、Gleason の音声言語の定義は次の様に言い換えられる。すなわち、「音声言語とは、一定の意味内容を言語音声を媒介として一つの個体から他の個体に伝達する道程の全体系である。」

同様に、Gleason の文字言語の定義における書き言葉 (writing) も、書記形態 (written form) と限定して考えなければならない。この様に限

定するならば、Gleason の文字言語の定義は、「文字言語とは、一定の意味内容を書記形態を媒介として一つの個体から他の個体に伝達する道のりの全体系である。」と言い換えられる。

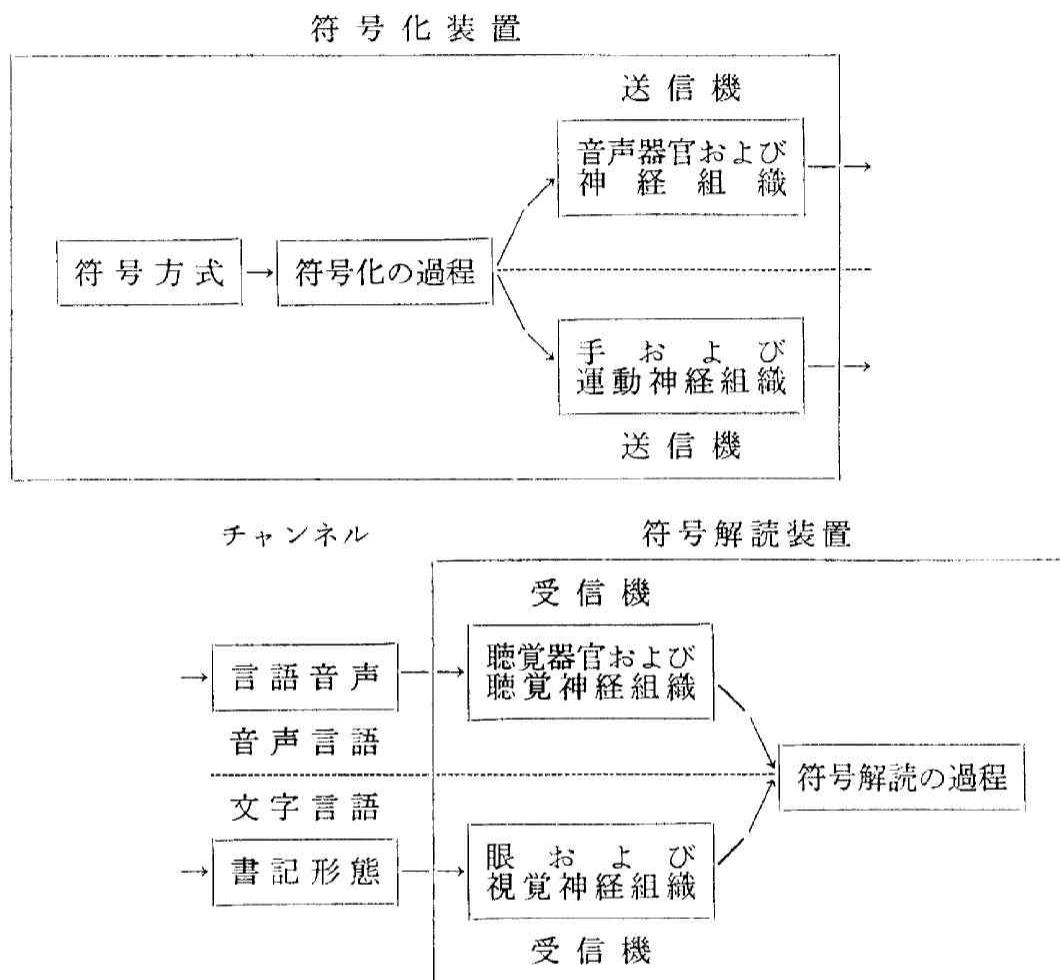
Gleason は、伝達過程に不可欠な要素として、符号方式 (code)、符号化 (encoding) の過程、チャンネル (channel)、符号化装置 (encoder)、符号解読 (decoding) の過程、符号解読装置 (decoder) の五つを挙げている。符号方式とは、恣意的な、前以って整えられた一組の信号 (signal) である。符号化の過程とは、符号方式のある信号が選ばれてチャンネルに入れられる過程である。チャンネルとは、符号方式の信号を伝える媒体 (medium) である。符号化装置とは、符号化の過程を行なう人または装置である。符号解読の過程とは、信号が同定され、その信号によって行動の方向が影響される過程である。符号解読装置とは、符号解読の過程を行ない、それによって行動の方向が影響を受ける人または装置である。⁷³⁾

Gleason の定義においては、音声言語も文字言語も共に、上で述べた要素を含む伝達の過程の全体系である。音声言語と文字言語の区別は、話し言葉 (speech) に基づくか、書き言葉 (writing) に基づくかに依るものである。Gleason の話し言葉と書き言葉の概念規定が不充分であったので、その再定義を試みたのであった。その再定義によると、speech と writing は、言語音声と書記形態という限定された意味になる。このことから、音声言語と文字言語の区別は、言語音声と書記形態の相違に基づくことになる。言語音声と書記形態は、伝達の過程のチャンネルという要素に相当するものである。

このことから、音声言語と文字言語の区別の問題は、伝達の過程のチャンネルという要素、すなわち、言語音声と書記形態という媒体と、それを作り出す送信機と受信機の問題に還元されることになる。そうになると、符号方式、符号化の過程、符号解読の過程は、音声言語においても文字言語においても同一ということになる。

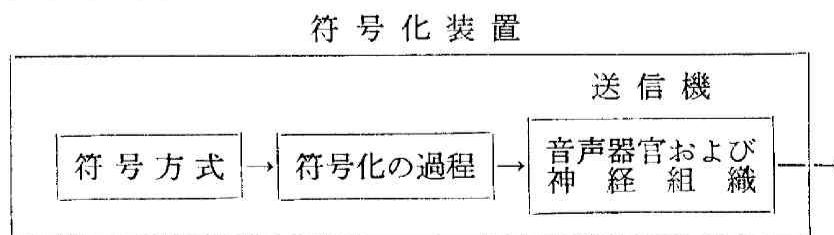
音声言語にあっては、送信機は音声器官 (organs of speech) とそれを支配する神経組織である。媒体は音声器官によって作り出された言語音声である。受信器は、聴覚器官とそれを支配する聴覚神経組織である。文字言語にあっては、送信機は文字を書き記す手とその運動を司る運動神経組織、あるいは印字機械である。媒体は書記形態である。受信機は眼と視神

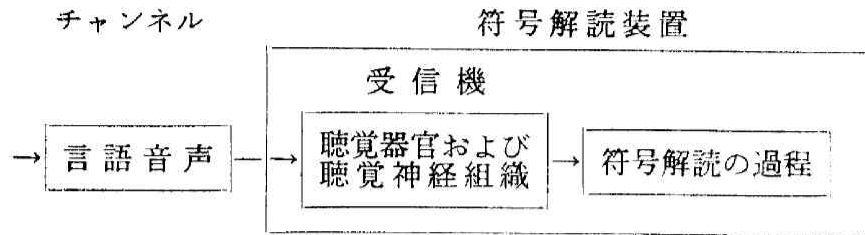
経組織である。この伝達の過程のモデルを図示すると次の様になるであらう。



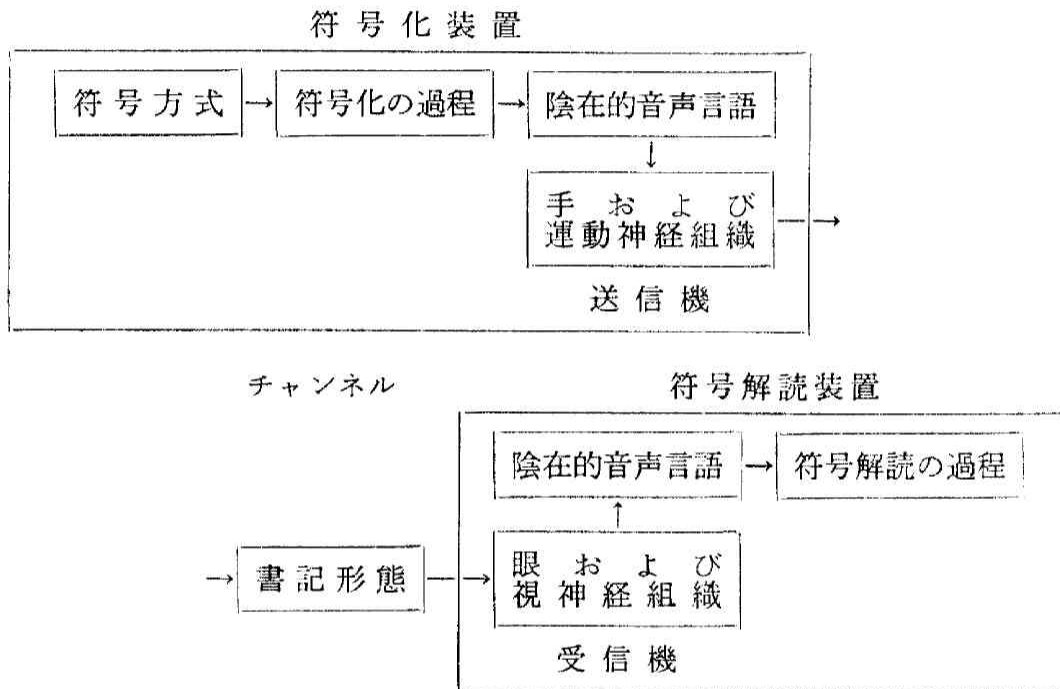
Gleason は、「文字言語は、基本的には音声言語の表示 (representation) である。」⁷⁴⁾ と述べている。それならば、上の伝達の過程のモデルは、音声言語の伝達の過程のモデルと文字言語の伝達の過程のモデルの二つに分かれる。これを図示すると次の様になるであらう。

音声言語の伝達の過程





文字言語の伝達の過程

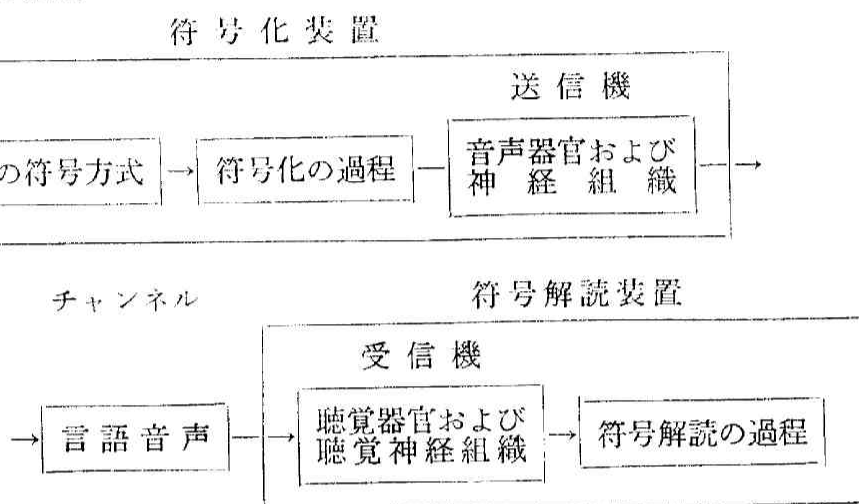


Gleason は、言語学は厳密に限定した場合には、伝達の過程の符号方式 (code) の面のみを扱うと述べている。⁷⁵⁾ 符号方式は、Gleason の定義に従えば、恣意的な、前以って定められた一組の信号である。マルティネ編 *La linguistique: Guide alphabétique* のに従えば、符号方式とは、言語単位と配列法の目録であり、これは狭義の言語と同一である。⁷⁶⁾

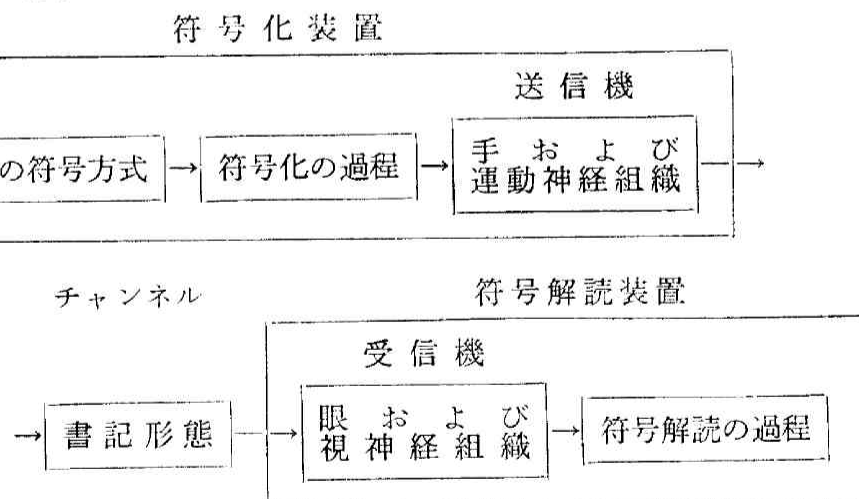
Gleason は、音声言語と文字言語の差異は、既に見た様に、構造のあらゆるレベル、すなわち、音韻論、形態論、統語論、語彙および文体のすべてに見出されるとしている。このことは、マルティネの定義に基づいて考えると、音声による伝達 (spoken communication) と文字による伝達 (written communication) は異なる符号方式 (code) を持っていることを意味する。しかし Gleason も述べている様に、話し言葉 (speech) と書き言葉 (writing) との間には密接な関係があり、解明される諸構造も

多くの点で類似しているのであるから、音声による伝達と文字による伝達における符号方式は、互に共通な部分を有しながら、それぞれ異っていると考えられる。従ってこの観点に立った音声言語と文字言語の伝達の過程のモデルは、次の様になるであろう。

音声言語の伝達の過程



文字言語の伝達の過程



Gleason は、音声言語と文字言語の相異点を次の点に求めている。第一は、音声言語には方言的変異 (dialectal variation) があるのに対して、文字言語においては、それは重要でない。第二は、文字言語は、それと併用される音声言語の影響を受けるばかりでなく、他の文字言語によっても

影響される。第三は、文字言語は、句読法を持つが、音声言語はイントネーションを使用する。第四は、話し言葉の方言は、比較的急速に移り変わる実体である。これに対して、正書法の変化は比較的緩慢である。第五は、文字言語と音声言語は、その語彙が異なる。文字言語には、同形異義語 (homonym) と同意語 (synonym) が豊富である。第六は、音声言語では、言語の位相 (level of speech) が複雑な構造をなしているが、文字言語では、これはそれほど重要ではない。⁷⁷⁾

Gleason は、音声言語と文字言語の影響は相互的であるとする。そして文字言語の音声言語に対する大きな影響として、「十分に確立した標準文字言語があると、その文字言語の口頭表現に近い話し言語の形態が創られるという結果を生む。」⁷⁸⁾ と述べている。これは既に Paul によって指摘されたところである。

1.2.12. 神保格の説

故神保格教授は、言語活動 (language) は、言語 (langue) と言 (parole) とから成るといふ Saussure の説に類似して、言語に言語材料あるいは語句材と、言話活動あるいは言行動の二つの方面を区別する。⁷⁹⁾

言語材料は、言語活動の基礎となり資料となるものであるが、心理的事実として見た時には、言語表象と名付けられるものである。⁸⁰⁾ この言語表象は、音声言語表象と文字言語表象とを総括した名称である。⁸¹⁾ 音声言語表象は、音声表象と意義表象と連合したものであるが、一定音声を使う発表了解行動、すなわち音声言語行動の記憶再現表象である。文字言語表象は、文字表象と音声表象と意義表象とが連合したものであるが、一定文字を使う発表了解行動、すなわち、文字言語行動の記憶再現表象を言う。この言語表象は、社会的慣習、すなわち、多くの人々が相互模倣によって繰り返し行なう意志的動作⁸²⁾によって、一定している抽象的なものである。⁸³⁾

言語材料の構成要素には、語音、文字、意義、語句がある。語句は、外形 (音声 [表象], 文字 [表象]) と内容 (意義 [表象]) が連合したものである。⁸⁴⁾ 語句には、その前後に切れ目を付けることが可能な独立したものと、その前または後にしか切れ目を付けることが可能でなく、常に独立した語句と一緒に用いられる独立しないものがある。⁸⁵⁾

語句は、ばらばらに記憶されているものではなく、互に色々な連結を持っている。この語句の連結には、順序連結あるいは序列と、連想語群ある

いは類群がある。⁸⁶⁾ 順序連結は、語句の横の連結で、Saussure の統合関係 (rapport syntagmatique) に相当する。連想語群は、語句の縦の関係で、Saussure の連合関係 (rapport associatif) に相当する。言語材料は、これを記憶している人の心の中で、縦横に連結して一つの網の様なもの、すなわち体系をなしている。⁸⁷⁾

前後に切れ目を付けることのできる単独の独立した語句、独立した語句と独立しない語句の連結を句節と名付ける。言語材料的文は、二つまたはそれ以上の句節連続序列のうち、「終結語句」が最後にあるものを言う。⁸⁸⁾

語句には様々な種類がある。品位による区別には、高い品位の語句、普通の語句、低い品位の語句がある。語源による区別には、本来語と外来語がある。本来語には、方言と称せられるものがある。⁸⁹⁾ また言語材料には、口語体のものと文語体のものがある。⁹⁰⁾ 言葉の始めは全て口語であるが、口語は時代と共に変化する。昔の時代の口語が、口伝えまたは文字に書かれて後世にまで残ったものが文語と言われるものである。⁹¹⁾

言語活動（言行動）は、伝達目的を以って言語材料を使う意志行動である。⁹²⁾ 言語活動は、抽象的な言語観念 (Sprachvorstellung) である言語材料を具体化する行為である。⁹³⁾ 言語活動は、言語材料による発表行為と了解行動を含み、広い伝達行動の中の一つに属する。言語活動において用いられる言語材料は、伝達目的を達するための手段、すなわち伝達手段と名付けられるものである。伝達手段には、身振り、信号、その他がある。⁹⁴⁾

言語活動における了解行動は、発表者の発表行動を理解する行動である。発表者の発表行動でない様々な動作、態度を介して心を想像推察することを解釈行動と名付ける。了解行動は、この広い解釈行動に属する特別の場合である。⁹⁵⁾

言語活動を満す条件には、人、場面、伝達内容、言語材料の四つがある。言語活動における人には、音声によって思う事を発表する「話し手」、音声を聴いて意味を理解する「聴き手」、文字によって思う事を発表する「書き手」、文字を見て意味を理解する「読み手」がある。「話し手」と「書き手」は、発表行動を為す人であるので「発表者」、「聴き手」と「読み手」は了解行動をする人であるから「了解者」と名付けることができる。⁹⁶⁾ この外、言語活動における人と人との関係は、年令、性別、社会的地位、教育程度など様々な関係がある。⁹⁷⁾

言語行動における場面は、発表者と了解者の心の中に取り入れられた共通の状況 (situation) と前後の関係 (context) を含む。⁹⁸⁾

伝達内容は、ある場面において、発表者が了解者に伝えようとする事柄、すなわち心の内容である。この内容には、知的なもの、感情的なもの、意志的なものがある。また伝達内容には、発表者だけに関すること、了解者だけに関すること、発表者、了解者以外の第三者および人間以外の事物に関することに分けることができる。⁹⁹⁾

伝達内容は、多くの場合豊富であり、複雑である。これに対し、語句の意義は伝達内容の一部分しか関係しないものである。発表者が、伝達内容に言語材料を当てはめる時に、大別して二つの場合がある。その一つは、分節のない発表で、伝達すべき心の内容を細かに分けて示すことをしないで、一まとめにして、感動詞、掛け声などによって発表する場合である。分節のない発表は、細かに意味を表わさないだけに多少の曖昧さは免れないが、多くはその使う時の場所の状況、前後の事情とを合わせて考えるので、意味を理解するのに大して不足はないものである。

その第二は、分節のある発表である。分節のある発表では、表わすべき事柄、心の内容を幾つかに分け、その一つ一つに別々の語句を当て、これを継ぎ合わせて全体を発表する。分節のある発表でも、語句の意義が、伝達内容を掩い尽すということは殆ど不可能である。しかし、場面、身振り、具体的音声の調子抑揚などが、その了解を助ける。¹⁰⁰⁾

挨拶の言葉、呼掛け、駅名のアナウンスなどにおいては、分節のある発表に含まれる言語材料の一部を含んでいる。しかしこれらの言語活動においては、その言語材料の表象を伝えるのではなく、その時の伝達内容全体を、その言語材料で表わすのである。この点から見るとこれらは、分節のない発表と分節のある発表の中間に位置する。¹⁰¹⁾

言語材料的文は、二つまたはそれ以上の句節連続序列のうち、「終結語句」が最後にあるものと定義された。これに対して、言語活動における言語材料的文 (文法的文) に相当するものを言語活動終結文と名付ける。言語活動終結文は、三つに分かれる。すなわち、1) 文法的文一個で言語活動終結文となる場合、2) 文法的文の形式を成さない語句だけで言語活動終結文となる場合、3) 文法的文が二つ以上つながって言語活動終結文となる場合、の三つである。¹⁰²⁾

言語活動における音声には、話し始め、すなわち「口切り」と、話の終り、すなわち「結び」がある。この口切りと結びとが、その時の一続きの話である。一続きの話の途中で息を継ぐために声を途切らせることがある。これを息の段落と名付ける。一続きの話は、1) 一続きの話が、一つの息の段落から成るものと、2) 一続きの話が二つまたはそれ以上の息の段落から成るもの¹⁰³⁾とがある。

一続きの話と息の段落と句との関係は、三つの場合がある。すなわち、1) 一続きの話が、一つの息の段落から成り、これが一句から成る場合、2) 一続きの話が、一つの息の段落から成り、これが二句またはそれ以上を含む場合、3) 一続きの話が、二つまたはそれ以上の息の段落から成る場合。そのある息の段落は、一句だけを含み、ある段落は、二つまたはそれ以上の句を含むことがある。¹⁰⁴⁾

言語材料には、口語体言語材料と文語体言語材料の二つの区別があった。言語活動には、音声を使う場合と文字を使う場合がある。言語材料としての「口語体」と「文語体」、言語活動の媒材としての「音声」と「文字」を組み合わせると四つの組み合わせができる。すなわち、1) 口語体言語材料に基づいて音声を使う言語活動、2) 文語体言語材料に基づいて音声を使う言語活動、3) 口語体言語材料に基づいて文字を使う言語活動、4) 文語体言語材料に基づいて文字を使う言語活動、の四つである。言語材料を実地の場面に用い、聴き手に伝達内容を口頭で伝える時、これを「音声言語」と名付ける。また、言語材料を実地の場面に用い、文字を書いて読み手に示し、伝達内容を伝える時、これを「文字言語」と名付ける。¹⁰⁵⁾

文字言語は、元来音声言語を書き表わし、これによって音声の意味を眼に訴えることである。しかし、文字の不足性と不規則性によって、また周囲の場面の状況に訴えて了解を助けることができないため、音声言語と多少異なる言葉使いが行われる。大文字、句読点の使用、段落を切ることは、眼に訴えるための新しい工夫である。¹⁰⁶⁾ 文字は、先ず音声を表わし、これを媒として意義を眼に訴えて表わす手段となるのであるが、一度一定の文字が一定の音声の符号となり、従って一定の意義を表わすという習慣が固定してしまうと、次にはその一定の文字が直接に意義の符号となる。¹⁰⁷⁾

1.2.13. 時枝誠記の説

故時枝誠記教授は、言語研究の基礎をなす言語の本質観を構成主義的言語本質観と過程的言語本質観に分ける。構成主義的言語本質観にあっては、言語は思想と音声あるいは文字が結合して出来上った一つの構成体であり、主体を離れた客体的存在である。これに対して、過程的言語本質観にあっては、言語は人間が自己の思想を外部に表現する精神・生理的活動そのものである。言語の本質は、主体的な表現過程の一つの形式、思想内容を音声あるいは文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとする言語本質観の理論を言語過程説と名付ける。¹⁰⁸⁾

言語研究の究極の課題は、言語の対象としての本質を明らかにすることである。言語過程説に立つならば、従って、言語研究の対象は、上に述べた主体的活動自体である。¹⁰⁹⁾ ソシュールの名称を借りるならば、精神物理的「言」循環である。¹¹⁰⁾

言語は、この様に常に主体的活動であるから、観察者がこれを対象として把握することは、観察者自らの主体的活動において、これを再生し、追体験することによって始めて可能になる。この主体的な言語を主体的のままに対象として把握する方法が、すなわち、解釈作業である。¹¹¹⁾

表現の媒材である音声、文字を通して、聞き手にある思想を喚起させることが伝達である。¹¹²⁾ この伝達が、言語学の基本的中心的課題である。¹¹³⁾

伝達の過程を成立させる条件には、話し手、聞き手、素材がある。すなわち、言語は、誰（話し手）かが、誰（聞き手）かに、何物（素材）かについて語ることによって成立するものである。¹¹⁴⁾ これらは言語の構成要素ではなくて、成立条件である。¹¹⁵⁾ 言語的表現は、常に何らかの場面において行為される。言語は、単なる主体の内部的なものの発動でなくて、これを制約する場面において表現されることによって完成する。場面とは、聞き手を含めて、その周囲の一切の主体の志向対象となるものを含む。¹¹⁶⁾ 言語の目的は、内を外にし、主体を表現するところにある。表現ということは、同時にその反面に、聴き手に理解されるということを含む。了解を考慮することは、場面について考慮し、主体が場面に融和することである。¹¹⁷⁾

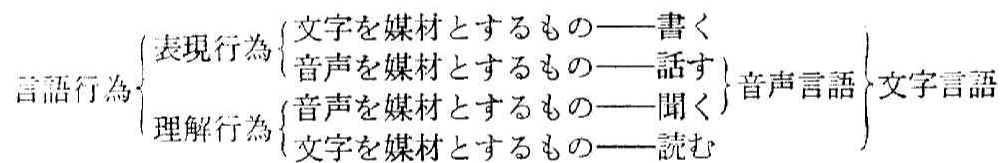
伝達の過程は、表現者の表現過程、空間伝達過程、理解者の理解過程の三つの部分に分かれる。表現過程は、表現素材である事物事柄を概念的に

把握する第一次過程，概念を聴覚映像に連合させる第二次過程，概念と連合した聴覚映像を音声に結びつける第三次過程がある。文字を用いる場合は，音声と文字に結びつける第四次過程を形成する場合，聴覚映像より直ちに文字に移る第三次過程を形成する場合，更に聴覚映像あるいは音声を經ず，概念より直ちに文字に移る第二次過程を形成する場合がある。¹¹⁸⁾

ソシュールの「言語 (langue)」は，言語活動における継起的過程中に位置を占める一部分的過程にすぎない。¹¹⁹⁾

空間的伝達過程は，物理的条件に還元することができる。理解過程は，表現過程の逆になる。

具体的言語行為は，音声を媒介とした「話す」という表現行為と，「聞く」という理解行為，文字を媒介とした「書く」という表現行為と，「読む」という理解行為という形態において成立する。音声を媒材とする「話す」という表現行為と「聞く」という理解行為において成立する言語行為を音声言語と名付ける。また文字を媒材とする「書く」という表現行為と「読む」という理解行為において成立する言語行為を文字言語と名付ける。この関係を図示すると次の様になる。¹²⁰⁾



表現行為は，常に聞き手の理解を通して，聞き手の何等かの行為を予想し，また聞き手の行為を制約するものとして行為されるものである。この様な言語行為と，それによって展開する行為との関係を言語の機能的関係と名付ける。この言語の機能には，実用的機能，社交的機能，鑑賞的機能がある。¹²¹⁾

言語は，具体的には，「話す」，「聞く」，「書く」，「読む」のいずれかの形態において成立し，それらが言語の機能を担った何等かの下位形態において実現する。音声言語と文字言語は，相互に代替せられないところに，それぞれ特殊な機能的関係において生活と結びついている。音声言語には，会話，演説，講演，討論，報告などの種々な形態がある。文字言語にも，記録，論文，手紙，随想，小説などの種々な形態がある。¹²²⁾

言語の単位としては，語，文，文章がある。これらの単位は，構成的言

語観における様に、全体を分析して得られる究極体を意味するものではなく、全く質的統一体を意味する単位である。¹²³⁾ 語は、思想内容の一回過程によって成立する言語表現である。¹²⁴⁾ 文は統一性、完結性を有する具体的な思想の表現である。¹²⁵⁾ 文章は、文を越えた一つの独自の統一体であって、¹²⁶⁾ 表現の展開がその構造的特質である。その展開の核心となるものは、文章の冒頭であって、冒頭が如何に分裂し、如何に拡大し、如何に屈折して行くかというところに文章の展開がある。¹²⁷⁾ 文章の成分は、一般に文節、文段、段落と呼ばれ、あるいは全体との相互連関の上から、章とか篇とか呼ばれることがある。¹²⁸⁾

1.2.14. 服部四郎の説

服部四郎博士は、音声言語（話し言葉）を、口で話して言語音声と称するオトを発し、それを耳で聞いて諒解する言語と定義する。また文字言語（書き言葉）を、文字で書き表わしてそれを読んで諒解する言語と定義する。¹²⁹⁾

文字言語が音声言語と異なる原因について、服部博士は、「我々が他人の音声言語行動を諒解するのは、彼の音声器官の社会的習慣運動の結果である音声の音色を知覚し認識するためばかりではなくて、情意的意識的内容の反射的表出である声音の色合、抑揚、強さなども同時に知覚し、更に相手の表情や身振り、時には話題となっている対象や事態を知覚することが、我々の諒解行動を助けるのである。然るに如何に精密な表音文字を用いても、せいぜい音韻を正確に写し得るのが限度であって、その他の補助的な要因は除外されるから、そのために生じ得る諒解を防ぐために、色々工夫しなければならない。」¹³⁰⁾ と述べている。

この点について、Charles Bally は、*Le langage et la vie* で、「会話では場面というものが殆ど常に与えられている。話される事柄は眼前にあるか、またはわけなく思い浮べることができる。これに反して物を書くときはこの場面をみずから作り出し、観念の特異の排列によってそれを組み立てなければならない。」¹³¹⁾ と述べて、音声言語の場面依存性と文字言語の文脈依存性を明らかにしている。

服部博士は、音声言語と文字言語は互に区別すべき概念であるが、言語現象においては、前者が主であり、後者が従であるとする。その理由の第一は、我々は音声言語を習ってから文字言語を習う。すなわち、文字言語

を習う時は、音声言語を基礎として、それに類似したところの多い文字言語を習うのである。故に常に類推作用が働き、文字言語は徹頭徹尾音声言語に依存している。第二は、習得の方法も異なる。第三は、文字言語は、原則として音声言語に変更することができる。¹³²⁾ 従って文字言語は、音声言語が基礎となって、その上に文字言語としての規範が重なったものである。¹³³⁾

一方、文字言語が音声言語に影響を与えることは日常の演説講演その他にしばしば見られるところでありこれが文語的音声言語発生の原因となることもあろうとしている。¹³⁴⁾

註

- 1) 山本光雄訳,「命題論」,「アリストテレス全集1」, p. 85.
- 2) *Ibid.*, p. 85.
- 3) *Ibid.*, p. 86.
- 4) *Ibid.*, p. 85.
- 5) *Ibid.*, p. 85.
- 6) 田中美知太郎篇, 世界古典文学全集16,「アリストテレス」, p. 39.
- 7) *Ibid.*, p. 40.
- 8) *Ibid.*, p. 154.
- 9) *Ibid.*, p. 155.
- 10) *Ibid.*, p. 155.
- 11) *Ibid.*, p. 69.
- 12) *Ibid.*, p. 98.
- 13) *Ibid.*, p. 69.
- 14) *Ibid.*, p. 155.
- 15) Hegel 著, 武市健人訳,「哲学入門」, p. 29.
- 16) *Ibid.*, p. 328.
- 17) *Ibid.*, p. 329.
- 18) *Ibid.*, p. 330.
- 19) Hegel 著, 船山信一訳,「精神哲学」下, p. 131.
- 20) *Ibid.*, p. 135.
- 21) *Ibid.*, pp. 137-138.
- 22) *Ibid.*, p. 140.
- 23) *Ibid.*, p. 140.
- 24) Humboldt 著, 岡田隆平訳,「言語と人間」, p. 84.
- 25) *Ibid.*, pp. 68-69.
- 26) *Ibid.*, p. 90.
- 27) *Ibid.*, p. 97.
- 28) *Ibid.*, p. 108.

- 29) *Ibid.*, p. 132.
- 30) *Ibid.*, pp. 38-39.
- 31) *Ibid.*, pp. 78-79.
- 32) *Ibid.*, p. 84.
- 33) Hermann Paul, *Prinzipien der Sprachgeschichte*, p. 373.
- 34) *Ibid.*, p. 374.
- 35) *Ibid.*, p. 50.
- 36) *Ibid.*, p. 404.
- 37) *Ibid.*, p. 405.
- 38) *Ibid.*, p. 410.
- 39) *Ibid.*, pp. 413-417.
- 40) Henry Sweet, *A New English Grammar*, p. xiii.
- 41) *Ibid.*, p. 6.
- 42) *Ibid.*, p. 6.
- 43) *Ibid.*, p. 7.
- 44) *Ibid.*, p. 202.
- 45) *Ibid.*, p. 203.
- 46) Ferdinand de Saussure, *Course de linguistique générale*, p. 45.
- 47) 市川三喜監修, 「英語教授法事典」, p. 323.
- 48) *Ibid.*, pp. 325-338.
- 49) Harold E. Palmer, *A Grammar of Spoken English*, p. xxxiii.
- 50) Edward Sapir, *Language*, p. 17.
- 51) *Ibid.*, pp. 21-22.
- 52) *Ibid.*, p. 20.
- 53) Leonard Bloomfield, *Language*, p. 21.
- 54) *Ibid.*, p. 282.
- 55) Martin Joos (ed.), *Readings in Linguistics*, p. 26.
- 56) Leonard Bloomfield, *op. cit.*, p. 52.
- 57) Charles F. Hockett, *A Course in Modern Linguistics*, p. 4.
- 58) *Ibid.*, p. 4.
- 59) Henry Allan Gleason, Jr., *An Introduction to Descriptive Linguistics*, p. 408.
- 60) Leonard Bloomfield, *op. cit.*, p. 8.
- 61) Ferdinand de Saussure, *op. cit.*, p. 46.
- 62) 服部四郎, 「言語学の方法」, pp. 134-135.
- 63) *Ibid.*, p. 23.
- 64) *Ibid.*, p. 24.
- 65) Henry Allan Gleason, Jr., *op. cit.*, p. 2.
- 66) André Martinet, *Elements of General Linguistics*, p. 18.
- 67) Henry Allan Gleason, Jr., *op. cit.*, p. 373.
- 68) *Ibid.*, p. 425.
- 69) *Ibid.*, p. 408.
- 70) *Ibid.*, p. 408.

- 71) *Ibid.*, p. 409.
- 72) 「世界大百科辞典」, 第9卷, p. 67.
- 73) Henry Allan Gleason, Jr., *op. cit.*, p. 374.
- 74) *Ibid.*, p. 425.
- 75) *Ibid.*, p. 374.
- 76) André Martinet 編, 三宅徳嘉監訳, 「言語学事典」, p. 127, p. 132.
- 77) Henry Allan Gleason, Jr., *op. cit.*, pp. 425-439.
- 78) *Ibid.*, p. 438.
- 79) 神保格, 「言語学概説」, p. 18. 「言語学」, p. 49.
- 80) 神保格, 「言語心理学」, p. 12.
- 81) *Ibid.*, p. 9.
- 82) 神保格, 「言語学」, p. 30.
- 83) 神保格, 「言語心理学」, pp. 9-13.
- 84) 神保格, 「言語学」, p. 55.
- 85) *Ibid.*, p. 88.
- 86) 神保格, 「言語学概論」, p. 95. 「言語学概説」, p. 29.
- 87) 神保格, 「言語学」, p. 121.
- 88) *Ibid.*, p. 113.
- 89) *Ibid.*, pp. 86-102.
- 90) *Ibid.*, p. 175.
- 91) *Ibid.*, p. 229.
- 92) *Ibid.*, p. 129.
- 93) 神保格, 「言語学概論」, pp. 68-69.
- 94) 神保格, 「言語学」, p. 130.
- 95) *Ibid.*, pp. 131-132.
- 96) *Ibid.*, pp. 138-139.
- 97) *Ibid.*, p. 141.
- 98) *Ibid.*, pp. 141-144.
- 99) *Ibid.*, pp. 144-152.
- 100) *Ibid.*, pp. 153-175.
- 101) *Ibid.*, pp. 182-183.
- 102) *Ibid.*, pp. 199-203.
- 103) 神保格, 「言語学概論」, pp. 26-92.
- 104) *Ibid.*, p. 93.
- 105) *Ibid.*, p. 206. 「言語学」, p. 176.
- 106) 神保格, 「言語学」, pp. 173-174.
- 107) 神保格, 「言語学概論」, p. 72.
- 108) 時枝誠記, 「国語学原論」, pp. 1-5.
- 109) *Ibid.*, p. 121.
- 110) *Ibid.*, p. 71.
- 111) *Ibid.*, pp. 14-18.
- 112) 時枝誠記, 「国語学原論 続篇」, p. 51.
- 113) *Ibid.*, p. 22.

- 114) 時枝誠記, 「国語原論」, pp. 40-41.
- 115) *Ibid.*, p. 51.
- 116) *Ibid.*, pp. 44-46.
- 117) *Ibid.*, p. 138.
- 118) *Ibid.*, pp. 90-91.
- 119) *Ibid.*, p. 87.
- 120) 時枝誠記, 「国語学原論 統篇」, p. 11.
- 121) *Ibid.*, pp. 72-94.
- 122) *Ibid.*, pp. 141-142.
- 123) 時枝誠記, 「日本文法 口語篇」, pp. 21-22.
- 124) *Ibid.*, p. 50.
- 125) *Ibid.*, p. 231.
- 126) 時枝誠記, 「文章研究序説」, p. 17.
- 127) 時枝誠記, 「日本文法 口語篇」, p. 287.
- 128) *Ibid.*, p. 289.
- 129) 服部四郎, *op. cit.*, p. 21.
- 130) *Ibid.*, p. 67.
- 131) Charles Bally 著, 小林英夫訳, 「言語活動と生活」, p. 142.
- 132) 服部四郎, *op. cit.*, pp. 72-78.
- 133) *Ibid.*, p. 134.
- 134) *Ibid.*, p. 72.